

義和団事件の英雄・会津人柴五郎の生涯

令和2年10月12日
横浜歴史研究会 大瀬克博

1900年6月、排外運動を行う秘密結社義和団は清国軍と共に紫禁城近くの公使館区域に籠る外国人と中国人クリスチャンを攻撃する。北清事変である。僅か450人の連合軍は攻める4万人の中国兵と2ヶ月に亘り戦い守り切る。この戦いで最も功を挙げたのが柴五郎率いる日本軍であった。指揮官柴の名声は世界に響き欧米で広く知られる最初の日本人となった。



柴の幼少期と会津戦争

柴五郎は安政6年(1859) 280石の会津藩士・佐多蔵の五男として生まれる。

慶長4年(1868) 五郎10歳の時に新政府軍の会津進攻が始まる。新政府軍が若松城下に侵入を開始する前日の8月21日、母ふじは山菜取りを理由に面川村の山荘に五郎を泊りかけて送り出す。家に残る唯一の男子五郎を助け一家全滅の危機を避けるためであった。父と兄たちは籠城し戦っていた。柴家の女性は新政府軍が侵入したら潔く自害しようと心に決めていて、祖母、母、姉妹の5人は自宅で、長女の姉は婚家で自刃したのである。妹は僅か7歳の幼子であった。五郎は山荘で大叔父からそれを聞き衝撃のあまり卒倒した。会津攻防戦が終わり五郎は自宅に戻る。鶴ヶ城と言われる城は砲撃で見る影もなく崩れていた。灰と瓦礫の山となった屋敷跡で遺骨を拾いながら涙が止まらなかった。柴五郎は晩年にその時のことを書き記している。「自害し果てた祖母、母、姉妹のこと、路傍に身を投げ、地を叩き、草をむしり泣き叫びしこと、昨日のごとく想わる。」

斗南藩

明治3年 会津藩士と家族たち約1万7千人は青森斗南藩へ移住を強いられ、柴家から父、長兄夫婦、そして五郎が斗南に移った。会津藩実高66万石から実収7千石の斗南藩への移住はまるで流罪に等しく、藩士と家族は飢餓と寒さとの闘いに遭遇する。

冬の寒さは厳しく想像を絶する苦渋の生活であった。柴家が住んだ家は冷たい風が吹き抜けるあばら屋で、板敷に蓆を敷き米俵に入って寝た。

食べ物は海岸に流れつく昆布や若布を干して碎き、山野の蕨を集めてすり潰す。それを薄粥に入れたものが常食であり、餓死、凍死を免れるのが精一杯であった。用水は近くの川から運ぶが、冬は凍った川面に穴を空けて水を汲み、その水が家に持ち帰る前に凍ってしまう程の寒さであった。

死んだ犬をもらい解体して食べたことがある。不味くて喉を通らなかった。それを見た父から「会津の武士ども辺地で餓死して果てたと薩長に笑われるは後の世まで恥辱なり。会津の国辱雪ぐまでは犬猫喰っても生き残れ。」と叱責される。

斗南の生活はまさに臥薪嘗胆の表現が相応しいものだった。

陸軍幼年学校から士官学校へ

明治4年12月、絶望のどん底にあった五郎に朗報が舞い込む。斗南藩の選抜で青森県庁給仕に採用が決まり青森県大参事の野田豁道邸の家僕を兼ねて働く。野田は熊本出身で横井小楠の門下生、函館戦争の軍監として活躍し後に男爵となる。

明治5年に五郎は東京での勉学希望を野田に許され上京し、会津出身の山川浩宅に寄食する。山川は生活困窮の中で五郎を受け入れた。山川は斗南藩大参事を経て東京にいた。会津戦争日光口の戦いで敵将谷干城に認められ陸軍に出仕していたのである。

翌明治6年に野田、山川を保証人として陸軍幼年学校の試験を受け合格する。野田そして山川家族の喜びもひとしおであった。柴は後々まで野田、山川を生涯の大恩人と言っている。

幼年学校の教育はフランス式で教官もフランス人、フランス語で地理、歴史、数学などを学んだ。授業は何も分からず悔し涙にくれながら必死に勉強する。努力を重ねた末に末尾の成績から優等生となる。

明治10年、幼年学校を出た五郎は陸軍士官学校に進む。日露戦争で騎馬兵団を率いた秋山好古は幼年学校、士官学校の同期であった。この年2月には西南戦争が起こる。五郎の兄四郎は「薩摩に一矢を報いざれば地下の父母に申し訳なし」として山川浩と共に政府軍に加わり参戦する。山川は薩摩軍に囲まれた熊本鎮台に一番乗りを果たす武功を挙げ後に男爵となった。

山川浩の弟健次郎は後の東京大学総長、妹捨松は元帥大山巖夫人である。



野田豁道



山川浩
Wikipediaより引用

義和団事件と北京籠城戦

士官学校を出た柴五郎は明治17年に参謀本部清国福州駐在となる。その後、北京に移り清朝との戦いに備えた北京周辺の調査偵察を行った。明治20年12月に帰任となり満州を経て朝鮮半島を縦断する陸路での帰国を決める。約4ヶ月に亘る厳冬の満州、朝鮮の旅は苛酷を極めるが、この時の調査が日清戦争で大いに役立ったのである。

明治27年2月にイギリス公使館付き武官としてロンドンに赴任するが、同年7月の日清戦争勃発により帰国。そして明治30年から1年半を再度イギリス公使館で勤務する。五郎はこれらの経験を通じフランス語、中国語、英語に堪能な語学の達人となり豊富な人脈を築いた。

明治33年1900年4月、五郎は駐在武官として2度目の北京勤務となる。この時期の清国は欧米列強が我が物顔に振る舞い、それに対し義和団という結社が「扶清滅洋」をスローガンに、各地で外国人そして中国人クリスチャンへの襲撃を繰り返していた。その年6月には20万人の義和団が北京に入城した。この事態を憂慮したイギリス、アメリカ、ロシアなど11ヶ国の外交官関係者と護衛兵そして中国人クリスチャンを加えた計4300名が紫禁城近くの東交民巷公使館区域に避難した。そして諸外国の侵略に危機感を持った清朝政府は義和団の支援を表明し4万人を超える兵で公使館区域を攻略し戦いが始まった。籠城側連合軍は護衛兵に義勇兵を合わせた450名の兵力で絶望的な戦いであった。



義和団

この籠城戦の総指揮官はイギリス公使マグドナルド、彼が最も信頼し実質的な指揮を委ねたのが柴五郎だった。柴は防衛計画を練る各国指揮官会議の共通語であるフランス語、更に英語、中国語に堪能で北京事情にも詳しく指揮能力に優れ、人柄の良さもあり尊敬を集めた。

圧倒的な兵力を持つ義和団と清軍に東交民巷は徐々に侵略破壊され8月にはついに全体の半分以下の領域まで追い詰められる。食料は底を尽き飢えも加わり悲惨という言葉を通り越す状態となり、日本兵の睡眠時間は3～4時間であった。このような極限状態での人々の救いは日本将兵の勇敢さ、我慢強さそして微笑みであった。

そして全滅間近となった8月14日、天津を発った2万の連合援軍が漸く北京に入り救われたのである。その日、清朝皇帝、西太后たちは西安に向けて北京を離れた。

籠城戦の総指揮官マグドナルドは戦後の指揮官会議で声明を出している。

「日本人こそ最高の勇気と不屈の闘志、類稀なる知性と行動力を示した英雄たちである。冷静沈着にして頭脳明晰な柴五郎中佐に率いられた日本兵士の忠誠心と勇敢さ、礼儀正しさは特質に値する。私は日本人に対し深い敬意を表明する。」

イギリスの日本への信頼は厚くなり後の日英同盟につながる。大国イギリスが「栄光ある孤立政策」を捨てアジアの小国日本と同盟を締結したことに世界は驚いた。

柴五郎は欧米各国から勲章を授与され、タイムズ特派員モリソンの報道により「コロネル・シバ」の名で広く西洋に知られる最初の日本人となった。

その後の柴五郎

明治40年に少将に昇進し再びイギリス大使館武官となった。2年後の日本への帰任に際してはイギリス王エドワード7世より賓客として王室離宮に招待され5日間滞在する。王を始め皇太子及び首相のもてなしも受け、王よりは勲章を授与され数々の品も賜った。一平民でイギリス王室からこのような礼遇を受けた例は空前絶後とされている。

柴五郎は大正8年に会津出身者として初の陸軍大将となった。そして昭和5年に予備役に退いている。

昭和20年8月の太平洋戦争終結の時には陸軍の最古参長老であった。敗残者の悲惨さを身を持って知る五郎は軍長老として日本国に申し訳ないと切腹を図る。しかし高齢の身に命を絶つほどの力はなく死ぬこと叶わず、4ヶ月後の12月13日に87年の人生を終えた。

引用及び参考文献

- ・ある明治人の記録 石光真人編著 中公新書
- ・北京籠城日記 柴五郎、服部宇之吉共著 東洋文庫
- ・守城の人 村上兵衛著 光人社NF文庫
- ・北京燃ゆー義和団事件とモリソン ウッドハウス瑛子著 東洋経済新報社
- ・黄砂の籠城(上、下) 松岡圭祐著 講談社文庫
- ・日本人の底力 小山矩子著 文芸社
- ・静かなる太陽 霧島兵庫著 中央公論新社

東交民巷(北京在外公館区域)略図

